

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 160号

平成27年8月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

「小西芳之助金曜会・同志会日誌語録」より (9)

逆境の意味

その頃友人が逗子にいたので毎月1回泊りに行った。その時近くの会長（阪井徳太郎）先生を訪問した。亡くなられる5、6年前から3年間、いろいろ食事を頂き1時間位お邪魔した。60余年実業界で超人的に働かれた先生ほど努力の人はない。御病気になられ、2～30年病床にあられた。最初の60年間は活動そのもの、最後の30年間は静止の生活だった。戦争当時ご長男が肺病になられ、又戦争により財産はみな進駐軍の手に渡り、貧乏の状態であられた。…しかし私が50回近くお会いしている間一度も困っておられるという態度は見られなかった。神に全部まかせて神のために生きている。普通のものなら今働けなくなったことを一言でも口に出しそうである。不平は一度も聞かなかった。

「小西先生、お祈りして下さい」と言われて私のみ祈ったようにも思うが、先生のお祈りはいつもこれまで生きて来たことを感謝され、これからも神のために生きることが出来るように祈られた。この信仰のもたらす力が逆境に勝ちえてあまりある生涯を、同志会を思い神に任せた先生の生涯を見て30年の先生の逆境の意味が分かった。この逆境がなかったら先生の信仰は出てこなかったと思う。60年の栄光の生活の後で30年の逆境を神の御旨に生きることが学ばれたと思う。我等も順境にあるが其れにおごらず、又逆境にへたばらず学んで行きたい。

(昭和37年6月15日 金曜会)

意志の強さ

第 2 は（阪井徳太郎）先生の意志の強さについて学ばれたい。偉い人は逆境に育つのだと思う。小学校の時から外に働きに出たということが追悼号に御令息の感想として出ている。それによって鍛錬されているのではないか。小さい時からの苦勞が大成への原動力となった。上京されて立教の西洋人の家に 1 軒ずつ仕事を頼まれた。最後に使ってくれたのが学校の僕として働ってくれた。校僕をしながら勉強された。その当時小林先生が立教の生徒であった。その時のランプ掃除の金を貯金により、自費で米国に行かれた。

先生の意志の強さ。どんな困難があっても止まんことが必要。同志会にフラフラ坐っているようではこの意志の強さは生まれえない。その会長先生のものの成就まで止まないこの強さを学びたいと思います。

（昭和 37 年 6 月 15 日 金曜会）

真正直に受けること

大事な問題であるが非常に近いところに迫っているような気がする。私の理解は神が一人子を下し、十字架につけられ、その贖いの功しによって救われる。それを真正直に受けること。故に自分の何物によっても信仰、救いに至ることはない。

パウロの信仰もそれに尽きると思う。浄土門の信仰もそれによく似ていると思う。行き易くして人なし。ロマ書 10 章には、心でキリストが復活したことを信ずる。口で救い主だと言えば救われる。手品でも何でもなし。我々の律法求道心とは無関係に信仰に至る。

(昭和 37 年 6 月 15 日 金曜会 続き)

金沢常雄先生の思い出

“Boys be ambitious.” という言葉の世間的解釈は聖書にはない。社会に出ていく人はどんな職業でも与えられたものを誠心誠意やってほしい。人の魂に食い込む人間になって欲しい。アブラハムはイサク唯一人に信仰を伝えた。同志会からそのような人が一人でも多く出てくれることを望む。同志会から地球を一周するようなホームランを。

私が 49 歳の時、八王子の自宅に金沢常雄先生（当時 55 歳）を訪ねる。丁度雨の降っている日であった。先生は小学校の校僕のような服を着ておられた。私が先生に“先生、私もこれから伝道師になります”と言ったら、先生は自分が初めて伝道師となった時、内村鑑三を訪ねた時の話をしてくれた。その時内村は金沢先生に次のようなことを言われた。「世間では、内村は雄弁だとか学問があるから飯が食えるというけれど、伝道師が生活できるのは神の恵みによるのだから、心配しないでやれ」

私は伝道師として 15 年経つが、子供の一人は牧師、一人は教師、娘は病院に勤めている。5 年間支えられてきたというのは神の恵みである。

（平成 27 年 10 月 19 日 金曜会）

ロマ書に感じたこと

2年間かけてロマ書の通説を学んだ。ロマ書に感じたことを12月30日年末所感で述べた。

まず第1は、聖書は学問の書であるという気がする。問い学ぶ書である。虚心坦懐になって学ぶ。信仰とはどういうものであるか、救いとはどういうものであるかを既成概念なしに学ぶ書である。信者に本当に愛がない。これは聖書が読めていない。キリスト教が分かっていないのである。全体を学ぶべきである。ロマ書は、キリスト教の全貌を現わしている。パウロの言うように神の国は、ことばでなく力である。

第2に忍耐の書である。忍耐をもって全体で言わんとするところを学ぶべきである。皆部分部分しか学んでいない。全体を学ばなければ聖書は分からない。終生赤子のような心で忍耐を持って学ばなければならない。

第3に力の書である。聖書にはこの世の苦しみ悲しみに打ち勝つ力がある。死に勝つ力がある。死ぬまで赤子のような心をもって聖書をとっくり学ぶ。死ぬまで聖書と取り組んで行かねばならぬ。深く

聖書の真理を探らねばならぬ。牧師には謙遜さがない。謙遜でないと聖書は分からない。

次にコリント前書をやろうと思っている。この前 I. C. C. (International Critical Commentary) の preface (序文) を読んだ。私はこれに打たれた。Preface には全巻の精神が出ている。そこにコリント前書の重要性の故に多くの注解書があるが、多くの名著の中でこの本自身の usefulness (有用性) が神の恵みによってパウロの書を学ばんとする学生にあらんことを望むということが記されてあった。人間でも多く人間があるが、その人自身の usefulness が神の恵みによってあるように！ my own usefulness (私自身の有用性) をもちたい。この I. C. C. は 1905 年に初版が出、今に至るまでその価値の衰えぬことは正に信仰の書である故であろう。

(昭和 48 年 1 月 18 日 金曜会)

卒業する諸君へ

卒業する諸君に一言申し上げたいと思って来たがどうも結論は出ない。が一言申し上げたいのは我々の人生は、50年、70年では終わらない、そのあとに新しい生命が開けて来るということである。聖書はしっかり読まねばいけない。私の10年の聖書研究の生活の結論は我々の人生は50年、70年では終わらない、その次にあるということだ。肉体は滅びるが生命は続く。諸君は人生で悲喜色々の経験をするだろうがこれを忘れないでほしい。すると業績が上がらなくても失敗してもがっかりせん。次の生で業績を挙げればよいからだ。イエスキリストはこの世の生命を憎む者は生きると言われた。それはこういうことである。成功も失敗も問題でない。与えられたことをコツコツやれ！

(昭和38年2月1日 金曜会)

東山魁夷先生の話

最近感じたことを申し上げます。NHKの人生読本に月火水の3日間、画家の東山魁夷先生が「絵と人生」という話をされた。2日目の話で「自分は美術学校を出て世界中の風景を見たが、努力すればするほど絵は画けない。昭和20年ころ応召して戦争に行き、朝から晩まで戦車に爆弾を投げ入れる練習をしていた。そういうある朝熊本城を見た。その時非常に美しく見えた。なぜかと反省するに、死を前にして人から賞めてもらいたいとかそんなことが一切なくなって心が純になったためであろう。またその頃同僚たちとこの世的な階級、有能無能を離れて友情を培ったのは本当にためになった。敗戦後千葉県の寺に入って絵を画いたが、その時の絵が画家として認められた最初のものである」私はこの話に本当に感激して涙が流れた。

(昭和38年6月7日 金曜会 阪井会長を記念する会)

東山魁夷さんの熊本城のようなものを発見せよ

淡々として神に生きることがよいのである。私は年を取ってから偉い人が嫌いになったようです。平凡な世の中の下積みの如き人こそ良いのだ。今コリント前書を勉強しているがパウロは humble（謙遜）な乞食坊主であったろう。平凡な人生に光る生涯。東大の学生は威張っている。本当の勉強は自分が偉いと思っている人にはできない。世の中のためになることはできない。平凡な人生において東山魁夷さんの熊本城のようなものを発見するのが信仰であると思う。会長先生が同志会を建てた意図は、自分は伝道出来ないが同志会を通じて伝道されたいと考えられたことだと思う。諸君も会長の心の底の願いに答えるようになってほしい。

（阪井）先生の実話を一つ。先生は築地で「使ってくれ」と言っ
て西洋人の家を一軒一軒回られ、5軒や10軒にとどまらずしらみ
つぶしでずっとまわられ最後の家で引っかかった。また西洋人の説
教を助けて得た収入もあった。やると思ったらどこまでもやるとい
う方であった。

（昭和 38 年 6 月 7 日 金曜会 阪井会長を記念する会 続き）